

学 位 論 文 要 旨

氏 名 澁谷 友和

題 目 小学校社会科未来洞察型授業の開発研究

本研究は、これまで小学校社会科で実践されてきた未来予測型授業の構成を検討するとともに、今日の予測不可能な社会の変化に主体的に関わり、これからの社会の変化や自分の行動しだいで到達できる希望の未来を描く児童の育成を目指す未来洞察型の授業構成を提案するものである。現在の小学校社会科で実践されている未来予測型授業には、(1) 未来を予測するための時間スケールの設定が感覚的なものになっており、特定の時期の未来だけを予測させる授業にとどまっている。(2) 過去や現在の社会事象の認識をもとに、その延長上で起こる確率の高い未来を予測させ、それにもとづく計画と実践を求める演繹型の授業設計にとどまっている。また、未来に対してネガティブな情報が蔓延している現代社会の状況下で「起こる確率の高い未来」を考えさせるため、予測される未来が暗いものになっている。(3) 起こる確率の高い未来の予測が中心であるため、価値判断の問いが固定的になっている。という3点の課題があり、社会の変化が急速で予測困難な時代を迎え、「感性を豊かに働かせ、未来を創る」授業構成とはなっていない。

本研究では、上記の課題を克服するため、複数の時間にアプローチし、不確実な要素を取り込みながら仮説的に未来を考える未来洞察の考え方を援用し、起こる未来だけでなく、起こる確率は低いかもしれないが希望のある未来を描く小学校社会科未来洞察型授業を開発、提案することを目的としている。

第1章では、小学校社会科授業における未来予測型授業の課題とその改善の方向性を提示した。過去の文学や絵画における未来像や、従前の未来予測型授業の先行研究を分析・検討する中で、時間スケールの設定や未来の捉え方を整理した。複数の時間にアプローチし、起こる確率の高い未来予測のみではなく、不確実な要素も取り込み、起こる確率の低い未来にも着目する「未来洞察」の考え方を組み込んだ小学校社会科の授業設計への改善の方向性を示した。

第2章では、小学校社会科における未来洞察を、「過去や現在の社会事象から起こる確率の高い未来とその影響を予測した上で、それとは逆の、現時点では起こる確率は低いかもしれないが、自分たちの希望の未来像を仮説的に描き、その実現に向けてのシナリオを創り出すこと」と定義し、この定義のもととなるイギリスのヒックス(Hicks,D)の仮説的に希望のある未来を描かせる授業構成を検討し、未来洞察型の授業設計を提起した。希望の未来を描かせる手段として、ヒックスの「すでに描かれた4つのシナリオの選択」というシナリオ活用方法ではなく、希望の未来のシナリオを実際に書く方法を取り入れた。これは、小学校では

物語に触れる機会が多く、物語を書く設定でシナリオを書かせれば、ヒックスのシナリオの選択という方法よりも不確実な要素に着目し、仮説的に未来を描きやすいと判断したからである。2つ目は、時間の広がりを設定して、複数の時間スケールで未来を捉える内容構成とした。ヒックスのタイムラインという考え方に、吉野やブローデルの時間の構造の視点を援用し、短期的、中期的、長期的時間スケールという3つの時間にアプローチし未来を考える方法として、時間のマルチ・スケールアプローチという方法を新たに提起した。起こる確率が高い未来を捉える際に、中期的、長期的な時間スケールで出現する内容が異なり、また、起こる確率が低い未来を捉える際にも、よりその未来を現実的にするための目標は、時間スケールによって異なるからである。

第3章～第5章では、上述した授業構成の視点にもとづき開発・実践した、希望の未来像を描く未来洞察型の授業について論じた。第3章では第5学年「これからの食料生産」を例に、先行実践が、地産地消などの学習でとどまるものが多い中、未来洞察を組み込んだ実践について論じた。ドローンを活用した産地と消費者の新しいつながりという希望の未来を描くシナリオも見られた。第4章では第6学年「わたしたちのくらしと税の役割」を例に、起こる確率の高い消費税の増税の賛成か反対かという価値判断ではなく、それとは異なる希望の税のあり方についてシナリオを描く実践について論じた。第5章では第4学年「わたしたちのくらしと水道水」を例に、起こる確率の高い水道料金の値上げ、水道水インフラの老朽化という未来予測をもとに、その未来とは逆の希望の未来を描き、水道料金が上がらない仕組み、水道水インフラに対する新しい仕組みなど、自分たちが考える希望の未来のシナリオを作成する実践について論じた。各学年の実践の結果、起こる確率が低い未来にも着目し、希望のある未来のシナリオを描く授業設計にすることで、主体的に情報を収集、解釈し、自分たちの未来を積極的に考え、その実現のための方法を描くことができ、子どもの意欲的な学びの実現に向けた授業改善の1つのモデルとして提起できた。

本研究の成果は、次の3点である。1つ目は、過去の文学や絵画における未来像や、従前の社会科における未来予測型授業の先行研究を分析・検討する中で、時間の設定や未来の捉え方を整理できたことである。2つ目は、ヒックスの論理を発展させ、複数の時間スケールにアプローチし、現在のところ起こる確率は低いかもしれないが希望のある未来を描く未来洞察型の授業構成論を提起できたことである。3つ目は、提起した授業構成論にもとづき、具体的な授業モデルを開発するとともに、検証授業を通して、その有効性を検証できたことである。

今後の課題は、カリキュラムをデザインするという視点で、他学年及び他校種への応用を検討すること、及び希望の未来をより現実的にするためのシナリオ作成方法の改善を検討することである。